

イエスの水、イエスの食べ物

(ヨハネ四・二三―一四、三四)

国谷さんが去って「+（プラス）」が付いた「クロ現」を見た。お題は中国の仏教ブーム。「唯物史観」から「拝金主義（向銭看）」を経て「スピリチュアル」を求めるところに来ていて、いう流れはよくある話。人間お金のない時は「金さえあれば」と思いやすいものだが、いざそれを得てみると金が必要しも人を幸せにするものではないことに気付く。そこで心の平安を信仰に求めていくというのだ。ただ皮肉なのはそれを後押ししているのがかの共産党であるということ。かつてアヘンと言いつつ宗教に頼って統治を行うというのはどういう風の吹き回しかと思えなくもない。

人間の欲の中で飲み食いに關するものは根本的なものの一つである。しかし人間のニーズは飲み食いに留まるものではない。それは何だろうか。イエスの言葉に聞いてみたい。

一、聖霊―イエスの与える水

ヤコブの井戸の傍らで疲れをいやして

いたイエスのところに一人のサマリヤ人女性がやつてきた。場所はパレスチナである。少し前のわが国のような「水と安全はタダ」とは全く異なる土地柄。水は文字通り「いのち」であり、彼女はまさにライフラインをつなぐために、この井戸にやつてきたのである。この女に向かってイエスは「ご自身が与える「生ける水」について語った。だが女はイエスの意図をつかむことはできなかった（一一節）。そこでイエスは更

にいう。「わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます（一四節）」と。

ここで問題になるのはこの「生ける水」という比喩が示すものは何かということである。多くの解釈があるのだが、最も優勢なものはこれを聖霊とする解釈である。確かに聖霊（主の霊）を水になぞらえることは旧約にも類例があるし（例：エゼキエル三六・二五―二七）、実際に三章においてもこのことは展開されている（ヨハネ三・五）。さらに七・三九において福音書記者はイエスの語った「生ける水」のことをはつきりと「御霊のことを言われた」と書いていることなどを総合すると、生ける水を聖霊と考えることは無理のない解釈である。つまりイエスが来た究極の目的は物欲を満たすことではなく、涸れきった心の井戸に聖霊を満たし、その人を永遠のいのちに至らせることだったのだ。

二、天命の成就―イエスの食物

サマリヤの女とユダヤ人のイエスの対話が続いているとき、食物を買いに行った弟子たちが戻ってきた。そして女がイエスのことを伝えに町へ行くなり弟子たちは疲れていたであろうイエスに食事を勧めた。ところが、である。おもむるに口を開いたイエスは「わたしには、あなたがたの知らない食物があります」と語られた。しかし弟子たちは先の女と同様、イエスのことばの真意を理解することが出来ず「誰かがイエスに食事を与えたのでは」と考えた。そんな彼らに向かってイエスは更に言った。「わたしを遣わした方のみこころを行い、そのみわざを成し遂げることがわたしの食物です。」と（三四節）。実際、食物を

買いに行く前に弟子たちの目に映ったイエスは疲れはて、井戸の傍らで腰をおろしていたのだ。だがどうだろう。その後の女とのやり取りのどこに疲労や虚脱感がみられるだろうか。確かにイエスは疲れていた。しかし神からの与えられたサマリヤ行き

い。むしろ目標を成し遂げようとするしなやかで前向きな精神は往々にして肉体を凌駕させ目標達成に至らせるのである。

* * *

カリフォルニア州サクラメント市にある、とある寿司レストラン。有名観光ウェブサイトで紹介されている一、六三二軒のレストラン中堂々の一位を獲得しているその店のオーナーはなんと牧師。荒井孝喜師はアッセンブリー教団の九州教区の教会での牧会の後、渡米、サクラメントにある日本語教会に着任された。しかし教会は小さく、教会から家族五人の生活を支える謝儀は出なかった。そこで彼は一計を案じ寿司屋になった。武家の商法ならぬ牧師の経営である。最初は赤字続きで大変だったという。しかし「とにかくお客様に喜んでもらおう」という思いは徐々に受け入れられ、アメリカ育ちの息子さんたちの代になって大ブレイク。斬新なアイデアで現地の人々のハートと胃袋をつかんで離さない人気店になった。息子の太郎さんに成功の秘訣を聞くと「とにかく謙遜であること。全部神様がしてくださったんですから」とのこと。このレストラン、今でも日曜は夜のみの営業だそう。神のいのちに生かされ、天命に生きると人生はまぶしく輝く。友よ、あなたはどうか。